



Title	佐藤昌介「米国通信」(『大東日報』)
Author(s)	逸見, 勝亮
Citation	北海道大学大学文書館年報, 3, 100-107
Issue Date	2008-03-31
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/32518">http://hdl.handle.net/2115/32518</a>
Type	bulletin (other)
Note	逸見勝亮(解題)
File Information	hemmi.pdf



[Instructions for use](#)

< 資料紹介 >

佐藤昌介「米国通信」(『大東日報』)

米 國 通 信

左の通信は米國紐育州和蘭耳郡マンウテンウエクホートンに在留する社友某氏より去八月廿七日附にて贈致一昨日本社に達せしものに係る因て斯に登録す但し同地より陸続通信の事は兼て契約し置きたれば得るに從て本欄内に登載を怠たらざる可し又氏は在本邦の日既に或る校にて學位まで得られたる人なれば其紀事も自ら確實なる可しと信す

編者識

寸楮拜呈候東京羈寓中は兩回書面拜呈仕候筈御覽に入候事と確信罷在候小生義も客月十四日英船アラビック号に乗船横濱出發航海至て穩にて別條無御坐十六日振にて桑港に到着兩三日滯港の上紐育府へ向け發車一日華頓府に滯留紐育府へ到着は本月十二日尚ほ紐育府に兩三日滯在の上當地へ罷越申候米國の旅も開明の今日と成りては昔日の如く珍敷無御坐候へば日記もあれども略して進呈不仕候唯聊か御参考にならんと小生の腦裏に感覺を生せるものを略叙せんに先づ第一に米國旅行と爲すに緊要なるは通貨交換の一條なり船賃は洋銀にあらざれば受け取らざ故に出發前に銀通用紙幣をメキシコ銀貨に交換するを要す然るに洋銀の相場は毎日高低あるを以て紙幣の準備ある上は相場は低き方に向きたる節に買置候方都合よし小生の出發する節は我通用紙幣一圓五十七錢を以て洋銀壹

[凡例] 1. 漢字の旧字・異体字は、基本的に常用の新字に改めた。  
 2. 合字は、すべて常用のひらがなに改めた。  
 3. 原資料に記載のある読みがな、傍点は省略した。

1882年10月4日付『大東日報』第154号  
 米国通信

左の通信は米國紐育州和蘭耳郡マンウテンウエクホートンに在留する社友某氏より去八月廿七日附にて贈致一昨日本社に達せしものに係る因て斯に登録す但し同地より陸続通信の事は兼て契約し置きたれば得るに從て本欄内に登載を怠たらざる可し又氏は在本邦の日既に或る校にて學位まで得られたる人なれば其紀事も自ら確實なる可しと信す

編者識

寸楮拜呈候東京羈寓中は兩回書面拜呈仕候筈御覽に入候事と確信罷在候小生義も客月十四日英船アラビック号に乗船横濱出發航海至て穩にて別條無御坐十六日振にて桑港に到着兩三日滯港の上紐育府へ向け發車一日華頓府に滯留紐育府へ到着は本月十二日尚ほ紐育府に兩三日滯在の上當地へ罷越申候米國の旅も開明の今日と成りては昔日の如く珍敷無御坐候へば日記もあれども略して進呈不仕候唯聊か御参考にならんと小生の腦裏に感覺を生せるものを略叙せんに先づ第一に米國旅行を為すに緊要なるは通貨交換の一條なり船賃は洋

銀にあらざれば受け取らず故に出発前に我通用紙幣をメキシコ銀貨に交換するを要す然るに洋銀の相場は毎日高低あるを以て紙幣の準備ある上は相場の低き方に向きたる節に買置候方都合よし小生の出発する節は我通用紙幣一円五十七銭を以て洋銀壹弗をかひたり洋銀は正貨少なく横浜銀行の弗手形或は上海或は東洋銀行の弗手形なり小生通貨交換の節に到り殊に感覺を生せるは我紙幣の下落是れなり百五十七円を以て僅かに百弗を買は我銀に価なく彼銀に価あるによりて斯く高低あるかと云ふに決して左なく単に我紙幣は不換紙幣なるに由りてなり不換紙幣の価なく当に人民の困苦を招く推して知る可きなり併し小生出発の頃は茶の米國に輸出する時にて米國が我邦に送金のある時節故に紙幣の価よき時節なりと云ふ冬分に到り主客異なり彼より送金なく我より輸出入の不平均を補ふ為に出金ある時節なれば弗の高き決して五十七銭に止まらず洋行者には損耗なり我貿易銀は横浜銀行にては一弗に受取れども桑港にては一弗に受取らず九十三四セントなり故に貿易銀も悉皆弗に交換して持参する方はよきなり併し又桑港にてはメキシコ銀も通用せず故に船賃を払ふたる上は船中雜費及び桑港の雜費は再び米貨に交換せざる可らず實に錯雜なるものなり米貨は又弗より高し我か交換せるときは弗九十二銭の米貨を買ふたり即ちメキシコ弗より低きこと八朱なり是に於て益我通用紙幣の下落を見る我一円七十銭の紙幣を以て漸く米貨一弗を買ふなり實際に入り比較する時は我通幣の価なきに歎息せざるを得ず實に理財を挽回し交換紙幣の位置に直すは今日の急務に非ずして何ぞや弗は東京或は横浜両替屋にて交換するを得可し又紐育まで為替を組むときは正金銀行或は日本商會に託せば可なり然るときは初めにせずとも時相場にて為替をなすを得るなり(未完)

1882年10月6日付『大東日報』第156号

米國通信

○八月廿七日米國發(前号の続)

荷物のカバン或はトランクは強き上にも強きを要す日本製のトランクは当時の製造随分強きが如きも船中及鉄道にては實に烈しく取扱ふを以て釘抜け鉄片は破れ荷物の中より出づる如き不体裁を醸すことあり

船は米國會社及び英國會社の兩社あり日本より來るときは英船に乗るを以て便とす如何となれば英船は北海を乗り航海短きこと凡そ一週間も短し併し船中常に寒中の如し小生七月炎天の節なれども船中は深霧咫尺を弁せざることあり常に冬服外胴を用ひ桑港着一兩日前より漸く夏の如くに相成申候

船客は上下の二等あり上等は桑港まで二百五十弗頗ぶる不廉なり併し取扱ひより食事まで實に美なり下等に兩級あり歐羅巴下等支那下等是なり一は八十五弗一は五十弗なり八十五弗を出すときは寢床もあり部屋もあり食事も歐羅巴人の食するものを出す可なりの取扱なり五十弗は實に甚し取扱ひ牛馬の如し蓋し支那移住民の乗るものなればなり朝晩は飯を出し昼は粥汁なり全体船中支那人を扱ふ人間を以てせざるか如し慘刻極まるものなり一航海に兩三人は必ず死すと云ふ蓋し航海の難には辛防強き支那人も堪えざるものと見ゆるなり

幸に我等の脇には死せし者なし併し支那人の移住は八月後には出来ぬ条約を清米両国間に結びたる為め我航海の時は最後の航海にて移住人千八百人も乗込み殊に麻疹流行の地方より来りしことなれば検疫の如きもの時々ありて其度毎に清客を扱ふこと実に牛馬に劣れり我同胞人民として目視するに忍びず上陸後到着に然るに殊に下等社会の者に尤も劇しこれ安直の労力を以て彼等を圧するによるなり移住禁制の条約の如きは当国にても公平無私の論客には随分其不正なるを鳴らす者あり是当然のことなり当時支那人は十万人も移住せり併し多くは他年金を得ば本国に帰るものなり過般支那人の帰国せし者二千人ありしが内に英字を読み得る者唯壱人ありと朦昧下等の支那人なれば蔑視せらるゝも無理ならずユタ、ウエヲメ、子バタ等の広漠たる諸州に小屋掛けをなし賤業を営み辛勞に堪えるは賞す可くも又卑むべく実に言語に絶せり到着に支那人を呼て「ジヨン」と云ふ恰も米人を蔑視して「ヤンケー」と云ふが如し時々我等を視て「ジヨン」と呼ぶものあり立腹に堪えずして我は日本人なりと云ふときは大に誤入る可笑

1882年10月7日付『大東日報』第157号

米国通信

○八月廿七日米国発 (前号の続)

船桑港に入り埠頭に横着きする時は宿引杯来りて甚たウルサシ併し入船のときは何時も我領事柳谷謙太郎君が船まで来らるを以て万事領事に依頼すれば甚た信切に万端世話さるゝを以て初めての旅客にても安全且外邦にて失策するの患なし荷物は税関吏埠頭に居て一々検査するものなり

桑港は西方の紐育と呼ぶ程ありて随分繁華なり併し欧羅巴及び東方の都府より来る旅人には田舎たるを免れずと云ふ

桑港より紐育地方に到るには鉄道上中下の三等あり上等は被是式百弗位を要す中等は車賃百五弗外に食事式十弗位を要す上中兩等「エクスプレス」と為すなり下等を「エミグラント」車と呼ぶ紐育迄六十五弗外に食事は自分にて為す者なり急き旅ならずは下等にてよし上等に乗れば寢車を備ふ中等は椅子に倚て七日七夜を旅す随分ツラシ若し上等を取る能はざるときは下等の方寧ろ中等よりよからん如何となれば寢床ありて自由も出来且時々停車場へ寄るを以て休息も出来尤も桑港より二千英里「子ブラスカ」州の「ヲマハ」までは中央大平鉄道社合衆大平鉄道社の兩会社にて建築せる一線路なれども巴東紐育までは幾線もありて上中下の差別なし下等の切符を以て上等に乗るなり旅客若し米国東部の繁榮なる都會を經過せんとせば「ヲハヨ」鉄道会社の切符を桑港にて取る可し風景の美なるを賞し「ナイヤガル」滝杯を見んと欲せば紐育中央鉄道会社の切符を買ひ求む可し蓋し数箇の会社ありて各々競争を為す為め「ヲマハ」巴東は取扱もよく車も早し自分の好む所に抛て桑港領事に依頼せば世話さるゝなり外邦に來りて領事館の懇切なる保護を受け明治政府の保護の厚きに感ずる也右は旅中の心得になること、存し御報道申上候紐育府景況等は他日に讓る御地及び日本の形勢御報道を乞ふ時下御自愛是祈る (終)

## < 解 題 >

逸 見 勝 亮

はじめに

佐藤昌彦は、父佐藤昌介が原敬の助成を得て『大東日報』に「米国通信」を載せることになった経緯を次のように述べている。

(旅費は)官を辞した時の勲励賞与金を基礎として漸く工面した。無論不充分であつたから船は三等、汽車は移住民列車に乗りあらゆる苦心をしてニューヨークに到着したのであつた。此の不足な渡米費を助ける為と更に十四年七月結婚して東京に残してある妻ヤウ(私の母)の生活の為に、盛岡時代からの友人原敬と約して原が主宰して居た大東日報に米国通信を送つて稿料を得たのであつた<sup>1)</sup>。

1882年7月に佐藤昌介は農商務省御用掛を辞し、家族を東京において渡米した。1883年12月には農商務省御用掛に任ぜられるが、当初は私費によつた。その間の家族の生活費に充てるために「米国通信」を書き送った。

拙論「札幌農学校の再編・昇格と佐藤昌介」<sup>2)</sup>においては、佐藤昌介と原敬との濃密な関係を示す事例のひとつとして、上記と同じ箇所を引いていたのとどまっていた。拙論執筆当時は未見であつた『大東日報』記事を収集する機会を得たので、同紙に佐藤昌介が寄稿した「米国通信」を覆刻した。あわせて若干の解説を試みる。

### 1. 「米国通信」に関する佐藤昌介の回想

『小樽新聞』(1921年11月6日付)は、暗殺された原敬の死を悼む佐藤昌介の談話を載せた。そのなかで、1882年に渡米した前後の事情について、彼の言を次のように伝えている。

(明治)十五年には僕が渡米する事となりその際東京にて会見した処当時報知の記者だつたと思ふが之から大阪に行つて大東日報を主宰する事になつたから米国通信をして呉れと云ふので承知の約束をして行つた(と云つて総長は当年のスクラップブックを取り出し原記者の編輯せる二十二字詰の通信文を見せられた)

「当年のスクラップブック」にあつた「原記者の編輯せる二十二字詰の通信文」とは、『大東日報』掲載「米国通信」記事である。別掲の通り、「米国通信」は22字詰である。

佐藤昌介は、自身が著した雑誌論文・随想・新聞記事、あるいは北海道帝国大学に関する新聞記事などを、実に丹念にスクラップブック、商品カタログに糊付けして保存していた。佐藤昌彦は、佐藤昌介存命中に『大東日報』掲載経緯の直話に接していた可能性はある。また、『佐藤昌介とその時代』を著す際に、「原記者の編輯せる二十二字詰の通信文」を読んだに相違ない。しかし、北海道大学大学文書館が収蔵している「佐藤昌介スクラップブック」に「米国通信」は含まれていない<sup>3)</sup>。なお、『小樽新聞』記事は、「原記者」に何故か「げんきしゃ」とふりがなを付しているが、もちろん「はらきしゃ」と読むべきであった。

やや時期を下った1929年に、ある新聞は佐藤昌介の「洋行閑話」を次のように伝えている。

その昔札幌農学校を卒業して同校に勤務してゐた青年時代の私は、クラーク先生の『ボーイズ・ピ・アンビシヤス』が、よほどよくしみ込んだと見えて覇気満々たるものがありました、学問慾に燃えて、当時の黒田長官に欧米留学を迫つたが容れられず、癪にさはつたので、そのまゝ辞表をたゞきつけて自費留学を企てた、けれどアメリカ行の金がまとまらない

何とかしてと考へて、役人をやめたときの勲励賞与金を基礎としてやりくり算段の結果、漸く工面してアメリカへやつとの思ひで渡つた、当時日本の一二の新聞に依頼されたので、ヨーロッパ旅行記とかアメリカの政治問題などを通信し、その報酬は郷里に残した家内の生活費にあてゝゐました<sup>4)</sup>

佐藤昌介が札幌農学校に勤めたのは1880年7月、1882年2月には開拓使廃止にともない札幌農学校は開拓使から農商務省へ移管、3月に同省御用係に就き、辞職したのは6月である。この記事に従えば、佐藤昌介が黒田清隆に「辞表をたゞきつけ」たのは、黒田が開拓使長官であった1882年2月までのこととなる<sup>5)</sup>。

「一二の新聞」のひとつは『大東日報』である。佐藤昌彦の記述、すなわち「東京に残した妻子（私の母と長姉千代子）の生活費は、東京で発行していた明治日報といふ新聞に米国の経済政治等について通信を送つて得た」に従えば、もうひとつは『明治日報』である<sup>6)</sup>。

## 2. 「米国通信」は無署名記事

1882年8月27日付「米国通信」は、『大東日報』に以下のように3回にわたって掲載された。

- (1) 第514号、1882年10月4日付、3面
- (2) 第516号、1882年10月6日付、3面
- (3) 第517号、1882年10月7日付、3面<sup>7)</sup>

1行は22文字である。第1回「米国通信」には、「編者識」とリードを付してある。「編者」が原敬、「社友某氏」は佐藤昌介である。「陸続通信のことは兼ねて契約し置きたれば得るに従て本欄内に搭載を怠たらざる可し」とあるからには、以後も寄稿があるはずであった。「兼ねて契約」との記述は、佐藤昌介の回想と一致している。寄稿者については、「或る校にて学位まで得られたる人なれば其紀事も自から確實なる可しと信ず」とのみ記した。

氏名・身分を明かさなかつたのは、『大東日報』が綱領に欽定憲法・天皇主権を掲げた立憲帝政党機関紙であったことと関係があった。「大東日報創立ノ概旨」(創刊号、1882年4月4日付)は「我邦ニ在テ天子主権ヲ掌握スベキ定分ハ天下ノ人心ヲ統一スルモノニシテ君臣ノ大儀因テ以テ存スル所ナリ」と天皇主権を高唱し、一方で民権派を批判してやまない。

……主権ハ天子ニ存在セズト唱ヘ動モスレバ名ヲ自由民権ニ籍リ放恣ノ言論以テ自快クスルモノ、如シ今ニシテ其気焰ヲ消滅シ其風潮ヲ制止セズンバ禍害ノ及ブ所実ニ測ルベカラザルモノアラン吾輩之ヲ憂ヘ茲ニ我新聞紙ヲ発兌シ天下ノ定分大儀ヲ明ニシ以テ世運人心ヲシテ邪僻偏險ニ陥ルコトナカラシメント欲ス我社創立ノ主旨此ニ在ルノミ<sup>8)</sup>

「米国通信」執筆者を匿名にしたのは、佐藤昌介を民権派・国権派の対立構造に巻き込むまいとする原敬の配慮である。佐藤昌介の憲法制定・自由民権運動に対する立場をつまびらかににはできない。とはいえ、立憲帝政党の、従って『大東日報』の政治的立場がいかなるものかを、「之から大阪に行つて大東日報を主宰する事になつた」原から聴いて承知していたと考えるのは自然である。そして、佐藤昌介もまた政党機関誌への記名を避けたのである。

### 3. 「米国通信」の内容

(1) 第1回「米国通信」は、切実な問題であった通貨交換に大部分を費やしているが、冒頭の10行からは従来は不明であった旅行日程を知ることができる。

- ① 1882年7月14日 横浜港を英国船アラビック号に乗船して出航
- ② ♫ 7月31日 サンフランシスコ到着
- ③ ♫ 8月1～2日 サンフランシスコ出発
- ④ ♫ 8月12日 ワシントンに1日滞在してニューヨーク到着
- ⑤ ♫ 8月13～14日 ニューヨーク州マウンテンビル・ホートン農場到着

また、「日記もあれども略して進呈不司候唯聊か御参考ならんと小生の脳裏に感覺を生せるものを略叙せん」と記述しており、佐藤昌介が日記をつけていたことは明らかである。

(2) 第2回「米国通信」からは、『佐藤昌介とその時代』が「船は三等、汽車は移住民列車に乗りあらゆる苦心をしてニューヨークに到着した」<sup>9)</sup>と記している船室等級別料金と、同書には言及がない中国人移民船客に関する佐藤昌介の視点を確認できる。

①船室等級別料金は、上等250ドル、ヨーロッパ下等85ドル、「支那」下等が50ドルであった。「支那」下等は中国人移民専用であり、佐藤昌介が利用した「三等」である。

②中国人船客の「取り扱ひ牛馬の如し」「全体船中支那人を扱ふ人間を以てせざるか如し惨刻極まるもの」「(検疫の)度毎に清客を扱ふこと実に牛馬に劣れり我同胞人民として目視するに忍びず」と憤りとアジア人としての屈辱感を顕わにしている。「上陸後到着処然り」とも記しており、旅行中は常に中国人に対する侮蔑を目の辺りにしていた。

③「朦昧下等の支那人なれば蔑視せらるゝも無理ならず」と、中国人移民とは異なる自分の位置を確認するのを忘れてはいない<sup>10)</sup>。

「同胞人民」と中国人移民に共感しながら、「朦昧下等」と断ずる佐藤昌介は、後に札幌農学校教授として植民学を講ずることとなる。

(3) 第3回「米国通信」からは「移住民列車」のことが多少判明する。

①サンフランシスコからニューヨークまでの鉄道運賃は、上等(寝台列車)が食事代を含んで約200ドル、中等は105ドル(他に食事代約20ドル)、下等は65ドルである。

②下等は「エミグラント」すなわち「移住民列車」である。食事は客が自分で調達した。

佐藤昌介は、下等は寝床があり「時々停車場へ寄るを以て休息も出来」るので、上等を取ることができず、急ぐのでなければ椅子に7昼夜座り続ける中等よりも楽だと述べている。もちろん経済的事情で下等を選ばざるを得なかったのである。ここには『佐藤昌介とその時代』が述べている「あらゆる苦心」をうかがわせる記述はないので、直話によったのであろう。

## むすび

「米国通信」によって、『佐藤昌介とその時代』が、ごく簡単にしか述べていない旅程を確認した。さらに、従来触れるところがなかった中国人移民船客を見つめる若き農学者の姿を想像することもできた。ただし、『大東日報』あるいは原敬から受け取った原稿料は不明である。

原敬は1882年10月31日に『大東日報』を辞して東京へ戻った。佐藤昌介は8月27日以降も原に宛てて「米国通信」を送り続けたはずである。その後の「米国通信」調査は他日の課題とする。



[注]

- 1) 佐藤昌彦『佐藤昌介とその時代』東京玄文社、1948年、100～101頁。
- 2) 『北海道大学大学文書館年報』第2号、2007年、32頁。
- 3) 佐藤昌介「スクラップブック」1(北海道大学大学文書館所蔵)。2007年7月27日、スクラップブック4冊は、他の資料とともに佐藤カツミ氏から北海道大学大学文書館に寄贈された。佐藤カツミ氏は佐藤昌彦(佐藤昌介5男)夫人。2007年8月27日に逝去された。  
「大学文書館で、佐藤昌介・佐藤昌彦関係資料を受贈」(『北大時報』第641号、2007年8月)も参照されたい。  
『北海タイムス』(1921年11月7日付)も「十五年に僕が米国に赴き其時原君と東京にて会見したが原君は之から大坂に行き大東日報を主宰することゝなれる故通信をして呉れと願はれ約束をした(博士は当時の通信を示しつゝ、語る)」と報じた。
- 4) 前掲佐藤昌介「スクラップブック」1。佐藤昌介が記事に「報知」「八月二十日」と書き入れているが、年の記載がない。前後のスクラップ記事から「1929年」と推定した。
- 5) 佐藤昌彦は「その間の関係は曖昧である」と述べている(『佐藤昌介とその時代』100頁)。
- 6) 同上、104頁。佐藤昌介の直話、掲載記事のスクラップがあったと推察する。『明治日報』記事は未見。
- 7) 東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター(明治新聞雑誌文庫)所蔵マイクロフィルム版に拠った。
- 8) 『大東日報』第1号、1882年4月4日付。立憲帝政党については、高木俊輔「立憲帝政党関係覚え書」(『歴史学研究』第344号、1969年1月号)を参照した。
- 9) 『佐藤昌介とその時代』100頁。
- 10) 中国人移民船客の料金は、サンフランシスコ上陸時に、中国人を雇い入れる組織が支払い、船賃は中国人の借金と化した。中国人移民については、リン・パン『華人の歴史』(みすず書房、1995年)を参照した。リン・パンは「クーリーを運ぶ輸送船のおぞましさは、悪名高いミドル・パッセージ〔大西洋の奴隷船航路〕のそれに匹敵するものだった」(54頁)と述べている。

[付記] 「米国通信」(『大東日報』)は、調べた限り佐藤昌介が公にした最初の文章であり、この「資料紹介」が「米国通信」の内容に立ち入って論じた最初である。新聞記事検索・収集は逸見・山本・井上が、覆刻原稿は山本が担当し、「解説」を逸見が書いた。

そして、この調査は佐藤昌介「スクラップブック」があってはじめて可能となった。同資料を御寄贈くださった佐藤カツミ・ユリ氏には改めて厚く御礼申し上げます。

(へんみ まさあき／北海道大学大学文書館長)